

松

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十五年十一月二十八日印刷局本

大正十五年十二月一日發行
(毎月一冊發行)



第六十七號

札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號七十六第



記事

Acht frohliche Tage auf Skier

— 樂しかつたスキーの八日間 —

Ignaz Karl Geur 氏
小川 泰 譯 [一]

初心者及び熟練者に與ふるスキー

ジャムピング練習要綱

廣田 戸七郎 譯 [一七]

スキー滑走に於ける二要素に就いて

岡村 源太郎 [二一]

フィットヒールド氏を訪ふ

内 山 數 雄 [二七]

時 重 大

君 生 [三〇]

彙報抄録

寫眞版

フィットヒールド氏の最近の書簡及肖像

ドレーズブルング

長谷川 敦

大正十五年十二月發行



Cambulat General Du. Sagon.
No 6

Paulineus Sagoner. Fashio
Vekuvua. Vesit hos mig i qvar skulle det
nitel glad mig om sig vunde vare han
til miger Lyke. Paderatione foreget
for den allverueligste Det med Officer
og Serser og jeg beklager meget at
Sars og Vasi Kote ikke faatt det nodven
dig af lagge op bueglak til examen
Skanu.

Jeg lik Indtryk af at Herr Fashio
Vekuvua og jure audeste et Star af
med de Diddinger og for bide Dem-bris
hane jure skulde indfende sig har De
L. H. Sagoner Ce. Forening til
Thrudgald 8. I sandhed mina hane med
Gruige succ. Skiblover som jeg har
har den Sagon som krevet til dette Gi
med. og skal gra indom der og allol. sk.
nuorge
a Kadeget
a Kadeget



Acht fröhliche Tage auf Skier.

(楽しかつたスキ一の八日間)

Ignaz Karl Gsur

小川 泰 譯

『やあ、とうとうやつて来たね。おまけに先生、スモーキングまで持つて来たぢやないか』さう云つて Rudi は懐しげに僕を迎へて呉れた。三月十一日の夜、行李と二臺のスキーを提けて八時の急行の出發前ギリギリに、僕はウィーン西停車場に降り立つたのであつた。他の二人は吾々の傍に立つて笑つてゐた。

さ、もすこしで吾々の四葉のクロバーを紹介するのを忘れるところであつた。太つちよの Rudi Eysank von mautenfels これは親しい間では Mizzerleis または樹懶(ナマケモノ)といふ兩極をなす綽名を持つてゐる。おしやへりの Melezky 黙りやの Zehler 並びに責任ある記者。或は Rudi の云つた如くんば Schinder (始終働き通しの人) であるところの小生。間もなく吾々は他のミツテルンドルフ (Mittendor) へ行くクラブ員達と一緒に箱に乗つてゐた。荷物が片付くと暫らくは雑談をしてゐたが、やがてミツテルンドルフの連中は僕のトランクの上で Tarock (トランプの一種) をはじめ、僕達はそれぞれ眠に就いた。Melezky と Zehler は一つ宛腰掛を占領し、Rudi と僕は仲よく tea-a-tee にくつ付き合つて床の上に轉がつた。唯 Steinach の驛で下車したミツテルンドルフ連中の元氣な Schilli と、何處だつたか忘れたが傍に寝てゐたルーデイのえらい寢返りどが吾々の夜の静けさを破つた丈けだつた。ルーデイは夢中で焼けた鐵管を抱きしめたのであつた。彼はそ

れから二日許の間指に火脹れをくつきけて歩いてゐた。

時々、眼をさましたのが窓の外を覗いて『暗い、ちつとも雪が見えない』など云つてゐた。Hochfilzenに向つて登るころ、殆んどまんなな月が上つて廣い雪原を黄色な光で照してゐた。僕は最早ちつと寝てゐる事は出来なかつた。みんな鼻を窓ガラスに押しつけて歡聲をあけた。

『新雪だ、Pulverだ!』

朝五時十七分 Kiezöthel で汽車から匍ひ出した時、空は一バイに星であつた。月はもう褪せかけてゐた。屋根の上には堆く新雪が積んでゐたけれど地面は暗く石の様に凍えてゐた。そんな事で然し吾々の興奮は鎮まらなかつた。上に行けば理想的な新雪があることを僕は知つてゐた。

喜び勇んで吾々は宿屋 Schwarzer Adler に入つた。最初に云つて置くが此處で非のうちどころない待遇を受けた。直ぐ僕は湯氣の立つコーヒを啜りながらストーブの傍に大きな犬 H. F. と並んで腰を下ろしたのであつた。

今日の行程に就ては大した議論はなかつた。直ぐに意見は一致した、H. F. へ! 六時四十五分吾々は氷の様に冷い空の中に出た。スキーを擔いでツルツルの氷の上を踊り廻つた。何時までも止めそうにないので Rudi に叱られる。間もなく吾々は街道に出て、素晴らしい森を抜け宿屋 Oholz まで登る。然し此處には寄らずに一寸息を休めた丈であつた。何と素晴らしい光景だ! 徐かに太陽のはほつて来て Der Milde Kaiser をその光に浸す。Kaiser の黒銀の尖端は谷の霧を抜いて天に向ひ真紅の光を浴びて光り輝く、恰かも幾千の松明が燃える様に。黙つて吾々は立つてゐた。眺めた、たゞ眺めた。彼方の Kaiser に、Tanem の氷の世界に、到るところ光、閃光、まぶしさと喜びに涙せん許りだ。然しさきを急がなくてはならない。直ぐスキーは穿かれる、そして五六度も道を曲るうちに吾々は新雪眩しい森林地に達した。その滑らかに白い雪の上に、吾々のスキーはリボンの様なシユブールを曳いて行つた。

斯うして口數なく滑つて行つた時、僕は B. Schottelius の言葉を憶ひ出した。それは一九〇四年 Alpenverein の會報に

掲載された彼の論文の一節であつた。

『これは果して尙吾等の森であらうか？ いかにもタンネの亭々とした圓柱は夏と同じ様に天を指してはゐる。けれどもあの深い神秘的な木梢の叫きは聞えない。咽喉を裂く様な鳥の叫びは聞えない。「永遠に歩む者」水の聲は聞えない。氷の翼も昨夜は吹雪が襲うて来た。あらゆるものを一樣に打ち惱した。しかも！何といふ美しさを彼は森に與へた事だ！燦たる白銀の鎧着て鳶色の幹は突き立つてゐる。枝は深く傾いて輝く冬の王冠を戴いてゐる。一と聲もこの雪の殿堂の聖き静寂を破るものはない——たゞ時折かすかな滴の音、彼方の村から傳つて来る明るい子供の聲、それはこゝまで来ると羞ぢらふ様に消えて行つてしまふ。吾等もまた口を噤んで次第に險しくなる蛇路を登つて行く。既に吾等の眼の前は明るくなつた。然し未だそれは山頂の自由境ではないのだ。タンネの森を離れる。吾等の前にはお伽(Mitchan)の國が横つてゐる。冬の鬱蒼たる森林が。——彼は無数の白い腕を天に伸ばしてゐる。重い雪を擔うた枝は目を晦ます許り入り亂れ交り合ひ、銀の網の目に絡み合つてその隙から深碧の空が笑つてゐる。殆ど頂きまでも吾等は滑つてゆく。怪しくも搖がぬリースの帳の下を。その帳は漸く明るく明るく行つて行く——そして遂にすつかり切れてしまふ。突如眼の前を圓い白い山頂が輝く蒼空を断ち切る。あと數分、かくて吾等は頂上に立つてゐる。光の中に！雲の影もない蒼穹から豊かに流れくる光の中に！巔を覆ふ雪庇の華やかな氷の裝飾に照り映え、下の沈黙せるタンネの入江の白地の上に長い影を描いてゐる。その光の中に！

美しさ、静けさの山に四邊の山々はその太陽の日を、その安息日を祝つてゐる。人間の悩み、人間の悲しみは彼等の明るい姿の前に聲を絶つてしまふ。』

間もなく吾々は Kaiserpromenade にやつて来た。少しして "Föhn" の岩角を回つて Tantalpe の Hütte の前に立つ陽の光を満身に浴びて。

深く雪に蔽はれた小屋と窪地の姿は素晴らしいものだ。黙り屋の Zeller すら騒ぎ出し、Rudi はこれほどの雪は國ぢやこ

の冬一度だつて見たことがないと云つた程だ。

然し間もなく彼はもう腹が空いたと云ひ出した。で吾々は更に進んで八時五十分にはヒュツテエの敷居を跨いだ。九時四十五分再び出發、峻しい蛇路に「Rangschplatz」に達する。それから五六度 Ruitl の深い溜息。十時三十五分吾々は頂上にスキーを脱いで祠の前に日光を浴びて立つた。

すばらしい感じ、幾百、幾千の白い Skize が轟々と峙つてゐる。吾々は幾つかの夏の識合に挨拶する。はるか下の方に黒い虫の様な貨物列車が匍つてゐる。Kizbühel の家々が挨拶してゐる。

空には然し黒い雲が湧いて來た。夏の様だ。で十時四十分スキーを穿き、もう一度あたりに別れを惜んでから、出發する。所々クラストの出來た雪の上を、直滑降、スウイング、ボーゲン、轉回、忽ち Rangschplatz に。また休む暇もなく！粉雪に半ば脛を没して、殆んど曲らずまっ直ぐに、Obere Reintalpe を過ぎ、幸福な小供の様に歡聲をあげ、歌をうたひながら。十七分の後には吾々は Untere Reintalpe まで來てゐた。頂上から約七百五十米下である。然しこれぢやまだ遅すぎる！塗蠟して一氣に滑降、二三度愉快な中絶、例へば僕などは不用意にジャムブをさせられたかと思ふと忽ち雪庇に出會して大轉倒をしてしまつた。ライントールを抜け一時二十分には St. Johann と Fieberbrunn の間の Alpbachgasse に來てゐた。

まだ大分時間も元氣もあつたので小さなシャツエが造られ、ジャムブやスウイングがはじまる。その爲にわざ／＼やつて來たかの様に。それから日向に横になつて食事しながら時を過す。夕暮どきをしばらく St. Johann の村へ向つて走る町の入口でスキーを脱ぐ。著音機を聞いて休みながら向ふのスロープに近衛狙撃兵が士官達と共に滑つてゐるのを眺める。五時二十分 20 Heller の汽車賃で Kizbühel に歸り大元氣で宿に入る。

すつかり疲れを回復し愉快に話し合ひ、九時にはベットに潜り込んであすの日を夢みた。

吾々が翌朝 Kapsbühel に向つた時は相變らず恐ろしい寒さで、太陽は雲の間から顔を出したがつてゐた。しかし空氣は

もう昨日の様に澄んではゐなかつた。Köglarban を通り Geigenbauer に来た時スキーをつける。クラスト、地面の出た崖、肥料塚、垣根などが屢々スキーを脱がせる。大きな間隔、いろんな不平、罵り、森の入口に来てから一緒になる。これからは素晴らしい紛雪の中に道を求めながら登る。九時四十五分には Askarnhe の小屋を見つけて隙間から匍ひ込む。食事をしてゐるとみんな凍えて来る。寒暖計は小屋の中でも零下三度を示してゐる。板の接目から鋭い北西風がヒュー／＼吹き込む。十時十分、リュックサックの中のあらゆる防寒具を身につけて滅茶苦茶に突進する。傾斜が急になるに従つて防寒具はまた袋に戻つてゆく。間もなく僕は Nordkamm に着く、これを越えて吾々は大馬力で Hochelkogel (1741m) に向ふ。十時五十分登頂。

あの獨特の圓望はシローイフェルの眼にとつて、まつたく嬉しいものであつた。まわりにはまつ白な圓頂の群、向ふには廣い大きな Horn それに並んで左に Hohe Salve Ehrenbachhöhe-Rettenstein の Kamm. 吾々の背後には Hohe Tauern の群、右手には Komstein と今日の目標である Stuckkogel-Gebra-Ranken の一列。

然し寒かつた、恐ろしく寒かつた。やつとの事でメレットキーが一枚撮つた。それから吾々は海豹をつけたまゝ窪みに下つた更に Stuckkogel の腹を登る。條件がよかつたからこれは理想的な行程に違ひない。十一時半 Stuckkogel に立つ。海豹をばつしスキーの雪を拂つて、壯麗なバノラマを眺めつゝ Kamm を越えて進む。地面の露れた Gaiskogel でスキーを脱ぎ更に小丘を上り下りして Gaisberg の下に着く。

これまで靜かに蹤いて来たルーデイとツエーラーは此處でサボリ始めた。でメレットキーと僕とで Gaisberg への短いピーク。ハンテイングを試みる。次第に曇つて雪の氣配がして来た。直ぐ滑降の方向を定めて置いて、更に小 Gebra に向ふ。直ぐ吾々はスキーを脱して峻しい盛り上りを一步一步登らねばならなかつた。然し暫くして吾々はこの苦しい努力をもあとにして一時四十五分には今日の行程の最高點、小 Gebra (1866m) を踏むことが出来た。氷の様な風がヒュー／＼鳴つてる。で吾々はびつたり身を伏せて少し許りの食事をし、素晴らしい下方の眺望を楽しむだ。それから感覺を失つた二つの顔、

僕は此方で寒暖計を風に曝し、見た、振つた、頭を振つた、も一度風に當てた、待つた、もう一度見た、そしてメレツキイに向つて云ふ『どう思ふ、何度だと思ふ？ 零下二十度。驚いた！』彼は立ち上つて温度計を風に向けた。しばらくして彼は叫んだ『二十三度だ！恐ろしい！行かう！』頭を振りながら吾々はステツプを踏みしめながらスキーの處まで下りる。後からやつて來てゐたルーデイとツエラーとが寒暖計を出してみて今更凄く寒さに驚く。水銀柱は切れてしまつた。上の半分は管の上部にはなれ、そして下のは三十二度を示してゐる。どうだ！

直ぐスキーを穿く、足のふるふる程な素晴らしい滑降で Brandner Hoehalpe を過ぎ Buchbauerlpe へ、更に Aurnach の谷間へ。

ハーモニカの伴奏で、曳船道を下る時吾々の顔は喜びと山の空氣に燃えてゐた。

氣持の良い Aurnach の村で吾々は珈琲と Euzan 酒で力をつけた。日没時に Kitzbühel に向つて歸る吾々は幾度か停つて夕陽の光の中に類ない美しい色を呈してゐる山の姿を見まもつた。

満月が既に登つてゐた。吾々は Kapsberg の前の道でスキーを脱いだ、メレツキイは大きな肥料塚とそして大きな笑の中に最後のテレマークをやつた。その罰と向ひ風のために彼は一番あゝに残された。

Kitzbühel の廣場ではもちつと可笑しなことがあつた。仲間の一人が藥屋で顔とスキーに使ふためワセリンを買つてゐた。僕は少しはなれて銀細工師の店の前に立つてゐた。そしてその主人が傍に立つてゐた。僕は一体 Herzegovina での軍隊生活以來「Heidi van, さいふ言葉が辭になつてゐた。それは「サア、行かう」といふ程の意味なのだ。でいま、仲間が藥屋をはなれないので「Heidi van, と呼びかけたものだ。すると僕の傍にゐた主人が言つたものだ『へい、まつたく、今日はお暖かだ！ (heiß ist warm)』

宿にかへつて吾々は「飲食は身体と心とを結びつける」といふ賢い言葉に違つた。それから繪葉書を書いて就寢。

十四日の朝吃驚して顔を見合せた。昨夜は一晚中雪が降つたのだ。そしていまも止み間なく渦巻いて降つてゐる。今日

のプログラムは Ehrenbachhöhe はどうなるのだ？ 之の間にスキーは修繕され、ルーデイの理想的なラックで準備が出来上つた。

明るくなつて太陽も雲の間から見えて来たので、吾々は身仕度をして九時四十五分に宿を出た。新雪は所によつて膝まで達くほどだつたから、町の中で既にスキーを履いた。勿論この雪では先登の者が雪を踏みつけて行かねばならなかつたそれで四十五分宛ラッセルをやつて最後の者と交代することにした。いつもあとから蹤いて来るルーデイに敵を打つてやらうと思つたので、僕がまづ順番を決めることにした。他の者達は僕の計畫を喜んで笑つてゐた。Hobahn のそばを過ぎ Einstelerei を通つて Ehrenbach の谷に進んだ。殆んど口を利かないで行く。たゞ四十五分毎に僕が 'Der Letzte vor,' とラッセルの交代を促す聲と、時々ルーデイがまた順番の廻つて来るのをこぼす聲とが聞ける丈であつた。

間もなく Ehrenbachkapelle の前に来た。此處から右手の斜面を急角度に登らねばならない。ところで復讐の時が来た。'Der Letzte vor,' 最後にあるのは然しルーデイであつた。ひどくふつく／＼云ひながら彼はラッセルを引續いた。一足毎に後滑りしながら、深く踏み込みながら、彼の丸い顔を汗が瀧の様に流れた。吾々が笑ふと彼は益々怒鳴り立てる。五分毎に彼は時計を出して『もう僕の時間は経つたぞ』といふ。十二時四十五分、下 Ehrenbachtalpe に着いた時我がルーデイはまるで水樋の様になつてゐた。やつと入口を見付け出し、食事をし、笑ひ、戯談を云ひ、歌つた。此處を去るのか辛くなつたほど。そのうちに空は曇つて来た。で僕はまだラッセルをやる筈のルーデイを止めさせて皆に注意を促した。用心深く、殆んど顔を雪につけるほどにして雪庇の下をくゞり抜け、頂上の絶壁を右に廻つて Hahnenkamme の指高標の處で吾々の名刺をブリキ罐に投げ入れた。靜かに雪が落ちて来た。で、標識旗が立つてゐるのを見付けた時は非常な喜びだつた焉んぞ知らん後には却つてこれを怨まうとは。何度が上り下りして三時〇二分には Ehrenbachhöhe に達した。眺望は零、方向を定めること極めて困難。Fleckenpankamm を越して Kirchberg に出るつもりだつたがこれは變更せねばならなかつた。僕は登路で Fleckalpe を認めた。メレツキーはさつきの標識が大きな弓を畫いて Fleckalpe に通じてゐるのを見た

主張する。で、例の旗に従ふことになる。然しそれも容易な事ではなかつた。と云ふのはこの霧と雪降りでは五歩さきが見えないのであつた。やがて一つの *Alpe* 前に来る。然しそれは *Sattelalpe* であつた、*Rieckalpe* ではなかつた。初めて僕は二週間前の行軍の時標したコースの上に居る事に気が付いた。それから滑降、それは寧ろ書かないで置かう。最後に峻しい斜面の上で地面の露れた處や切株や叢木との戦ひ。ルーデイのシユトツクのほか何も失はずに下りられたのは奇蹟だつた。五時二十分 *Kitzbühel* のジャムプ場のそばに着いた。吾々の若い元氣は少し働かなくてはゐられなかつたで、飛んだ、競争で轉んだ、それを見ては互に喜びあつた。

夕の鐘の鳴る時吾々は *Kitzbühel* に入つて來た。そしてベーコンと燻肉とキャベツの食卓に坐つた。また雪になつたのと、非常に愉快な氣持であつたので、今日は一つ減茶苦茶に騒いでやらう、明日はゆつくり朝寝をしてこの土地に別れを告げ *Arlberg* に向ふ事にしやう、と相談は決つた。然し腹をこなすにはまだ何か足りないものがあつたので、女中に相談してみた。彼女が *Schwarzer-gold* と答へるのを聞くと僕達の獨逸魂が猛然と目覺めて來たものだ。そしてこの三色の火酒シユナツスは何杯となくカラーの後に注ぎ込まれた。とうとう廣間の中で曲馬、曲藝、猿芝居がはじまつた。就中木馬跳びに於ける我が太つちよルーデイは傑出してゐた。彼は三人目を跳ぶ時眞逆様に引繰返つて肋骨がみしみしいふ程の目にあつたのだ。可愛相にその上布團をとられてしまつた。メレツキイがそれを持つて幽靈になつて家中をフラフラ歩きまわつてゐるのであつた。十一時半にはそれでも靜かになつた。僕は夢の中で *Kitzbühel* の生活をも一度繰返した。

翌朝十時三十六分宿を出た時雪はまだ止まなかつた。そして急傾斜の尾根々々からは大きな雪塊が響を立てゝすべり落ちてゐた。*Innsbruck* で晝飯、汽車は更に *Arlberg* に向つて登る。天氣は次第に恢復して來て *St. Anton* に下車した時雪はもう止んでゐた。*St. Christoph* まで行く豫定であつたが、電話で紹介したところ旅舎満員だと解つて、此の地に泊る事とし練習場に出て滑る。*Schneider* と二人のフライブルグの大學生か、種々な藝當を演じてゐるのを見て感心する。晩には *Schuller* の處のクラブに坐つて、他に仕方もなかつたので、*Hannes Schneider* とスキーのテヒニークフレイや會の經營上の問

題など話し合つた。九時頃空模様を見た時には冷い北東風が吹いてチラホラ星も見え出してゐた。これで明日の天氣は大丈夫だ。どうしても登らなくてはならないのだ。Christophでどうしても泊ることが出来なければ Umetitte に行けばよいのだ。心からのシー・ハイル！と左様ならの聲がテーブルの圍に起る。大きな薪が更にストーブに投げ入れられる。そして Gute Nacht !!

氷の様な北東風に追はれてまだ少し許りの雲は飛んでゐた。然し空氣は澄んでゐるし朝日は既に Schindlerspitze や St. A. Kopje を輝かしてゐた。温度によつて——ルーティは Bankille だと云つた、零下十二度であつたのだ——當分天氣が續くことが解つた。重いルツクザツクの事など忘れてしまつて Arberg の街を登つて行つた。神もこれ以上美しくは出来まいと思はれる程の朝であつた。これは總ゆるものを蔽ひかくす冷たい、白い死ではないだらうか。この豊かな光、華かさ、嚴かさ！ 眼も心も、悦しさに愉しさにいつばいなる様な！ 悲しみも悩みも忘れさせる様な日、生れ更つた様な力を感じさせる日、あらゆる勞苦と嚴烈な天候を忘れさせる日、吾々の記憶の中に生の幸福の微笑となつて残り、絶えず吾々を戸外に引出す日、山の、冬の陽に満ちた日！

深い新雪の中を吾々のスキーは天鵞絨の上を行く様に音もなく滑る。小さい子供の様に雪崩のトンネルを見て喜ぶ。二度もその下をくぐる、そして曲角に来る毎に停つて新らしい眺めを、印象を胸に收める。「冷たい角」の曲り角に来た時 Gammas と Fervall のあらゆる山々は太陽の鋭い光の中に輝き、Arberg の先觸れである素晴らしい Paternol は果もない様に蒼空に突き立つてゐた。間もなく街道を捨て、稍々歩調を速めて登る。九時二十分吾々はホスピッツの犬の嬉しげな聲に迎へられる。

St. Christoph! 一度見た者は恐らく永久に忘れられないであらう！ 高い山に圍まれたまつ白い窪地！ 山々の緩やかな傾斜は磨いた水晶の様にそれをつゝみ、真中に、たゞ時々のはる煙によつてそれと知れる様に、すっかり雪に埋もれた庵堂 Frier の小父さんと Umet の小母さんとは疲れて腹を空かしたシーロイファアの間にいゝ評判を持つてゐる。「あの人

達の處へ行けば大丈夫」。

恐ろしく好い天氣だ、雪は恐ろしく蠱惑的だ。食事をして寢床を整へてから十時十五分 Benschelkopf に向つて出掛ける。ヘルーンの洒落者がこの邊にやつて来て Benschelkopf とは一体何ものだ、Froier に尋ねたさうだ。答へて曰く「ありや私共の朝飯前に登る山でさあ、腸詰は ^{クネツテ}Vis-a-vis と申しますからな。えゝと、然しこいつああなた方にはまあお解りにはなりませんまい。あなた方のお國ぢや Benschelkopf は高々 Lungen haschelkopf くらゐのものでせうな」(山の形の形容の洒落らしい。譯者) 喘ぎ々々吾々は深い雪にシユプールを印して行つた。太陽が非道く好意を示して呉れるので、着物はだん／＼脱がれてゆく。Peischelkopf と P. 3404 の間に猛烈に急なスロープを大骨折で登つて行つた時——ラツセルは膝まで没してゐた——相變らずラストにゐて急なシユプールに後滑りしてゐたルーデイがまた文句を云ひはじめた『やい、Schinder! そんなに急に登るなよ、僕や蒸氣風呂に入りに来たんぢやないんだ。』次第に高くなる。Kaltenberg、Brillenkopfe、Sivethgruppe が浮んで来る。冷い風が吹きつける。尙幾つかの山の背をこえて十二時四十五分には Peischelkopf の上に立つ、二四一五米。石塔のかげに風除けしてスエタアを着、食事をとる。ルーデイは彼の「最高峯」が無性に嬉しくて、珍らしく欲しがりもせぬに菓子やチョコレートを頒けて呉れる。メレツキイは新しいナイフで自分の手を試験してゐる。多分頂上に赤い標をつけるつもりなのであらう。僕はみんなの代りに寫眞を撮る。そのうちに食事も了つて靜かになる。然し餘り寒くて長くはゐられない。一時四十分出發。風の様な速さで飛ぶ。時々雪煙が立つて轉つたなと思はせる。盲滅法に急阪を下りる、平らな窪地を走り抜ける、最後のコブを滑り落ちる。二時四十五分、吾々は臺所にゐる小母さんに呼びかける。『Einen Hunger haben wir,』

小憩して「稽古」に出る。小さなシャンツェで飛んでゐるうちにみんな氣が大きくなつてしまつて大きい方に出かける。非道いシャンツェだ。誰が一番ぶかど問題になる。僕がまづ試しにやつてみる。氷の様な着陸斜面 *Aufsprung* の上にとび下りる。メレツキイに向つてシャンツェが右に傾いてゐるから注意する様にと叫ぶ。彼は滑り出した、轉ぶ、起き上ら

ない。とう／＼困つた事になつたな、と僕は腹の中で考へる。ルーデイと僕と飛んでゆく、スキーを脱す、何でもないが脱がした丈だ。彼を室に運び込む、僕が痛くて泣く程摩擦して冷してやる。勿論後になつてからだが、マツサーチなんかしなかつたらと後悔した。ウィーンに来て踝の骨折だと解つたのだつた。晩、吾々は當惑し却つて坐つてゐた、新聞を讀んだりお互の顔を見合せたり、今日の災難の事を話してはどうか彼が *Yelling* にだけはほれる様にと望んだりした。

十七日の朝は普通の天気だつた。吾々三人が八時四十五分スキーを *St. Leon* に向けた時には、霧が重く家の圍りに立ちこめてゐた。軍路の様なシュプールは緩い斜面を登つてゆく。これ以上の *St. Leon* はないだらう。一本の樹もない、殆んど一様の傾斜をなして上つてゐる。一瞬毎に誰かゞつぶやく、こんな山がうちの方にあつたらなあ！何時の間にかはれてゐた、*St. Anton* の家々が親しげに挨拶を送つて来る。時々汽車の笛の音が聞えて来る。氷の様な青味を以て輝いてゐる雪庇の下を抜けると、直ぐ太陽の光が吾々の上から注ぎかゝつて来た。十時十五分圓い峯の上に立つて白い國を見渡す。午後 *Umerhütte* に行く道を捜す。*Schnee* の天邊を見上げる、明日こそ！一寸下りて日光の中に腰を下ろす、襯衣一つで、それでも暑くなるほど盛にテレマークを練習。十一時半此處を去る。直滑降、スウィング、直滑降、轉倒、直滑降スウィング、十二分でホスピートの前に立つた。

食事は濟み、ルックサックは締められた。メレッキキーに心からの別れを告げ、その上「*Lansen* でまた會はう」を繰返してから、午前の道をたどつて登る。*Galzig* の下を廻り、*Artenstätt* 附近の湖に沿つて *Umerhütte* に向ふ。ルックサックは益々重る。間隔は次第に大きくなる。然しこの苦しみも間もなく去つた。四時五十分には最後の土の出た處を越えてスキーを小屋に運んだ。錠はすぐ開いた、窓を開き、火を焚き。雪をとつて大きな桶に入れてからやつと寛ぐ。

やがて小屋の前に出て立つたとき僕は魅入らた様に停んだ。この気分！僕はたつた一度、*Trin* の麓の *Nazim* である秋の日没時に経験したことがあるきりだ。僕の前には世界が眞白な波状の線をなして横つてゐる。何物もこの静けさ均整を破るものはない。彼方、*Kaltenberg* のところに、太陽は山々と別れを告げんとしてゐる。最後の薔薇色の光が空を掠め

た。も一度バツと輝く、そして夕暮は来た。下の方から陰はしづかにせまつてくる。殆んど透明かと思はれる空にかすかな星が一つ一つ瞬きはじめる。すると下の *St. Christoph* に燈がつく。僕は祭壇に燈のとほされて伽藍の中に立つてゐる様な氣持だつた。この瞬間の偉大さと壯嚴さの前に僕は帽子を取つた。そしてあの古い歌の文句が傍に聞える様に思つた『旅人は立てり彼方の丘に、ひとりその神とゞもに。彼處に彼あらゆる美しきものを見、自からの大いさとこの乏しさとを感じつゝ立てり。』

斯うしてどんなに長く見惚れて立つてゐたか僕は知らない。小屋に入つた時には既にラムベは點され氣持よい温かさが領してゐた。食事が濟んで尙長いこと雑談をしたり、僕の調子の狂つた口ハーモカの伴奏で "*Prinz Eugen*" を歌つた。二人も低い聲で合せてゐた。少し心配しながら吾々は眠り場所を求めてゐた。すると突然ルーデイが——あの脂肥りのくせに彼は寒くて凍えやしないかと心配してゐたのだ——屋根を突き抜きはしなないかと思ふほど跳び上つた。彼は *Jim* の支部が用心深く布圍の他にシューラーフザックを備へて置いたことを發見したのでつた。すぐ寢具は分けられ空氣枕は服まされた。すつかり整つて吾々は袋の中に潜り込み鼻まで蔽ひをしてからお互に「お休み。」しばらくの間は蚤の跳ぶ音がきこえてゐたが間もなく靜かになつてしまつた。

六時に目覺ましたが鳴つた時々吾々は寢惚け眼でうなづきあつた。そしてなほ暫くの間は氣持よく欠伸をしたり、ころけたり伸びをしたりしてゐた。でも間もなく袋からとび出して寢床を片付け靴をはくために臺所に下りて行つた。身支度は出來た。ルーデイは帽子をまづ被つてしまつた。朝食は濟んで小屋は片付いた。海豹をつけ、僕があとのしまりをしてゐる間にルーデイとツエラーとは出發した。七時四十五分小屋の錠をかけた。天氣は好いといふ方ではなかつたがまづ我慢出來た、これより悪くさへならなければ *Tahnum* の下の雪の深い谷の中にルーデイとツエラーとがもう *Valleyjoch* に向つて行くのが見える。彼等は何事か論じ合つてゐる様子であつた。後で聞いたのだが彼等は "*Doktor Schindlerberg*、——彼等は *Schindlerspize* をさう呼んでゐた——に僕と一緒に登らずに濟ます方法を相談してゐたのだ。 *Joch* の下でもう

彼等に追ひ付いて、何も氣付づかずに僕は険しいスロープを登つて進んだ。八時半に僕は *Walfengipfel* にルツクザツクを下ろして *Schindler* に進んだ。半分ほど登つてから僕は二人に向つてあとからついてくる様にと叫んだ。然し二人は首を振つた。ルーデイが云つた。『駄目だよ、その間に *Valuga* へ行かうや!』これを聞いて僕の痲癩玉は破裂した。天上のモーゼも手を拍つて喜んだらうと思ふ様な山上の説教が始まつた。彼等はそんなこと何とも思はぬ様に靜かに進んでゆく、*Dr. Schindler*, など云つて喜びながら。僕は直ちにスキーを脱いで山の背にたどりつかうとした。然しこれは決して樂な事ではなかつた。岩はまるでガラスの様だつた。指が氷りについてしまふ。猛烈に峻しくてカチカチになつてゐる釘を打たぬ靴では一足毎に非道い苦しみだ。蟲のよいことを考へて僕はアイゼンをルツクサツクごと鞍部に置いて來てしまつた。駱駝の背の様な岩の間にはまだ胸までも入る雪が積つてゐる。幾度か失望したあとで九時十分、頂上二六三六に立つて前峯の間から谷を見下した時の喜びといつたらなかつた。天氣は悪くなつて、灰色の霧が一面に湧き上つて來てゐた。*Valuga* の方を望んだ時、急がなくちや駄目になると僕は腹の中で言つた。注意深くスキーの處に下り急いで二人のあとを追つた。*Schindler* の氷河に達した時彼等は南西の背の下の急斜面の處でスキーを脱ぎ朝飯をやつてゐた。僕が彼等に追付いてからアイゼンを付け、用心深く一歩一歩のほつて行つた。不愉快であつた。非道い峻しき、スキーは肩にかけることが出来ないで一方の手に提げ、片方の手は雪の中に支へてゐなくてはならなかつた。雪は一歩毎に大きな塊をなして足もさから轉けてゆく。背の所でスキーを下ろした時天氣は妙に重苦しくなつて來た。徐かに僕は岩を登つて行つた。最後の突起の角に來て振り返つた時、ルーデイはツエーラアの外套を着て下の方に蹕つてゐた。『オーイ、ついで來い!』と僕は叫んだ。『行けないんだ、僕あとても駄目だよ』『それぢや待つてゐる、直ぐ戻つてくるぜ』仕事は眞剣になつて來た。非常な吹きつ曝しだ、氷つて雪をかぶつた岩は一々雪をはらつて摺まねばならない。手は自由がきかないので交互に口に突込んで温める。フオークで物を食ふ様だ。ツエーラアはあきらめて下りてしまつた。間もなく僕は雪の裂目に立つ。最後のステップを切つて進み十時四〇分には *Valuga (2811m)* の頂上に達する。全く獨特の光景だつた。

たつた今まではつきりと輝いてゐた山々は赤つぽい鈍い光に照らされ殆んど頂まで一樣の灰青色のヴェールをかけてゐる憂鬱な嚴肅な気分だ、あらゆる浮世の美のうつろひ易さを思ひ起させる様だ。だが、今は哲學してゐる時ではない。下りろ！ 仲間の處にかへつた時天候は急激に悪くなつてゐた。ルーディは神鳴を聞いた猫の様に背を丸くして立つてゐるどんな工合かと聞くと『どうしたのか僕にも解らない、きつと山にあつたのだらう』といふ。Nitzで晩飯のとき彼は苦笑しながら白狀した。あれはみんなNitzに登らないで済ます爲めの手だつたのだと。惜しいことにもう敵をうつ時がなくなつてゐた！ 吾々は今度はスキーを束ねて注意深く Pizal Gletscher の方へ道をとつた。二三度注意しながら雪庇を下りて Valuga と Pizalfernerspitze との間に出で、それから一寸後戻りしてやつと上 Pizalboden でスキーをはく事が出来た。ひどい霧で殆んど自分のスキーも見えなかつた。それにまた寒くなつて來た、僕が滑り鐵を取り出した時その二つは寒さに割れてしまつた程だつた。徐かに慎重に吾々は灰色の中に進んで行つた。あんなに樂しみにして來た氷河の上を下ることはおぢやんになつてしまつた。その時霧の中に黒い人影が浮んで來た。St. Hell, St. Hell、それはウィーの連中で Kanda 君とその友人達であつた。

僕は道を求めるために先に立つてゆく。五歩さきは見えない。時々後戻りしなくてはならない。そしては上にのぼる。青く光つてゐる氷河の氷塊の下を抜ける。明るくなつて來る。Pizal の上の小屋に着く。一寸後ろを見返し天氣が良かつたらどんなに美しからうと話合つて、更に進む。間もなく Tuitkohl からの雪崩の道の手前に黒い旗が立つてゐるのを見るそれを靜かに横つて十二時三十五分下の小屋に晝休みする。

一時十分にはもう出發、溝が縦横に走つてゐる臺地を上り下りして、やがて Nitz を見おろし最後のスロープの上に来る。物凄いスロープだ。殆んどこれを滑降することに決つた。處がツェーラアとルーディはスキーを脱いだのだが靴ですら下り出したら止ることが出来ない。まつたく命からがらこれを降りて、最後の原を街道までぶつ飛し、一時四十五分にはスキーを Alpeinose ホテルのスキー小屋の中に立てかけた。部屋にはストーブがなかつたけれど、その代り窓は一つし

かなかつた。大々的に掃除をしてそれから食事はじまつた。しばらく静かにしてゐたけれど、午睡が了ると僕はタロツクの遊び方を教へられた。そして食つたり飲んだり、煙草をふかしたり、トラムプをしたりしてゐるうちに夕べは氣持よく過ぎて行つた。それから尙ながい間戸の外に立つて、また晴れあがつた星空を見あげ、吾々の經驗を、また一人といふものはいつも休むことのないものだ——次の登山の事を語り合つた。

吾々が行動を共にする最後の日、十九日の九時二十分 *Nitz* を去つて街道を下つて行つた時、太陽はキラキラと輝いて吾々の別離を難くするかの様であつた。

Flexenpass で吾々は *Nitz* の周圍の山々を見上げて別れをつけた。「これが最後ぢやない、またやつて来るんだ」と吾々は云ひ合つた。*Flexenfrasse* のトンネルや曲角も過ぎて、深い雪に埋もれた美しい村 *Mudon* の外壁を通つて宿屋 *Nitz Boneg* に入る。陽は到るところを照してゐた。外に内に吾々のコップの中に。非常に氣持よく話がはづんだので吾々は女將さんや果酒と別れるのがつらかつた。*Mudon* を出て滑つて行つたとき鐘がなり出した。そして晴着をきた村人たちがぞろ／＼とお寺に急いでゐた。また日曜が來たのだつた！ 然しそれは日曜の氣分以上のものであつた。壯麗に蒼空にそ／＼立つ *Silveta* の山群を見ながら *Taugen* に向つて降りゆく吾々の胸の中は。吾々がまだまだ長い間忘れ得ないだらう所の氣分であつた。たとへ吾々がこんな氣分から遠く離れて、毎日の變化のない生活に職業の義務にしたがはねばならぬ様な時にならうとも、また吾々疲れ果て打算的になつた人間の胸を、靈を大自然の美しさが捉へ、數時の間でも吾々を幸福な満ち足りた心にさせて呉れる時あれと願ふ時が來るとも！

吾々の善良なスキーは森蔭の道の上を思ふまゝがすべつて行く。餘りに早く *Arthertunnel* がまつ黒な口をひらいて吾々を迎へた。*Taugen* に着いた。沈んだ心で吾々はスキーをぬいで日向に並べる。太陽は『終り！』と云はうとするかの様に最後の雪の残りを稻妻の様な早さでとかし去つてゐた。僕が顔を剃つて着換へをしてゐた時、丁度 *St. Anthon* からの列車が着いてメレットキイが出て來た。下りて行くと盛んな挨拶と物語りがはじまる。彼の足はよくなかつた、残念ながら

彼は一緒にシユワイツには行けない、他の連中と一緒に家にかへることになる。食事が済んで吾々はも一度スキーをはくしばらくスウィングの練習、小さい *Line* とおしやべりをする。彼はルーデイのチョコレート・ボンボンのお蔭で吾々の仲間に加つたのだつた。そしてお父さんは今日お母ちやんを打つたよと話す、何故つて日曜だから、と彼はつけ加へる。それから吾々はある十字架の下の木に腰を下ろして暫らくの間、蒼い空を、彼方に明るい日光の中に横はる *Meesaplana* をちつと眺めた。重く非常に重く「仕方がない」が吾々の唇を洩れた。

七つ道具の荷造りが終つてから、ルーデイが長いこと私に悪どい程拂へ〜と云ふのでとうとう「祝ひ酒」の拂ひをした。彼は音楽入りの感謝並に惜別の演説をやつてそれに答へた。やがて汽車は來た。僕は乗り込んだ。また心からの別れの言葉、汽車は動き出した。僕は新しい美しいものを求めて進んでゆくのだ。

あれ以來僕は幾多の美しき物を経験し或は見て來た。幾度かもつと大きい *Home* に成功した。然しあの時、親しい仲間と一緒にすごした美しい時間の記憶はまだまだ判然と僕の胸に残つてゐる。まだ今でも僕はあの楽しい愉快だつた八日の旅を楽しく思ひ起す。

初心者及び熟練者に與ふる

スキージヤムピング練習要綱

Hans Schneeberger und Dr. Bader.

廣田戸七郎抄譯

練習といへば夏から續いての練習を必要とすることは當然である。何となればシーズンに入つてから急に体を慣らすとか、揉むとかといふ事は已にそれだけ時間的に損をして居ることになるから。

練習、それは運動家にとつて大いなる勞力作ある。精神的並びに肉体的に。

てはあるが此處にパーテル氏の與ふる練習要綱は、主としてシーズンに入つてからの練習のものであり、又スキートの技術といふものを余りに考察して居らない。單なるスキージヤムプをせんとする人への提言の様なものである。

パーテル氏は稀に見る實際の長い經驗を有し、相當の理論を説いて居るドイツのジヤムプアである。(筆者)

飛躍者^{スプリンゲル}はゲレンデ滑走に相當の熟練と實力を具有すべきである。

婦人は概して飛躍を學ぶべきでない。彼女達の体の構造は此スポーツには適して居ない。婦人の飛躍とは狼藉も甚しいものである。初心者は極く簡單に小さきシャントエを作つて始むるが宜しい。そして五―六米位の距離を飛躍するのが丁度適當である。先づ体の伸張と前傾とを練習する。而して着陸の抵抗は前足に受くる様にする。

力強き踏み切りが出来得る様になつてアプローチの距離を延長すべきである。体とスキーとの保持及び操作を注意することが大切である。

五一〇米程度を輕快に飛躍し得たならば、それより急斜面を選び前傾姿勢を學び、更に小さな上向きのシャンツエで練習する。上向きのシャンツエは踏み切りに於て体の前傾投出の練習に非常に有効である。

此間の練習は完全に踏み切り瞬間を意識し得るまで繼續し、又着陸の抵抗を主に前足に受け安定になるまで練習を續けて行ふ。次いで飛躍者は大規模の斜面に進む、シャンツエは一・一・五米位の程度のそして三〇度位の傾斜の斜面を假りに作るので充分である。此大規模のものではシャンツエから着陸斜面に平な部分を設け、フオムラダ（前提）そして飛躍者がシャンツエの端の一米後方で、着陸斜面を覗き得る程度に作る。これは練習目的として非常に利益がある。かかる斜面で飛躍者は三〇米までは飛び得る。

始めの内は一〇―五米位の程度から飛躍する。そして斯様な臺に於て同距離のアプローチから滑走して長期の間練習する。尙強い踏み切りを練習する。此間にしばしば上向きのシャンツエを飛躍する。二〇米位飛躍する様になると衝撃シヨックが大となるからその對策を講ずる。

着陸の安全率を高むる爲には、一・五―二米位の臺を作り、尙之を前提のない二五度位の斜面に於て練習すればよい。又水平に近い着陸斜面に於て練習することも安定率を高むるものである。

空中に於ける体の保持とスキー操作とに留意し、次いで常に次の事に注意する。

(I) 強い踏み切りによる距離延長。

(II) アプローチの滑走距離を延長せずに飛躍距離を高むること。

中等大の飛躍になれたならば、次いでアプローチの滑走距離を延長して飛躍する。若しも正しい練習を積んで居るならば、大飛躍丘に進み、長距離を飛行しても、それは決して困難ではない。

て先づアプローチの大なる速度に慣れること、又一層強き空氣の抵抗に打ちかつことにも慣れることが必要である。

飛行距離を延長する目的を以て、シャンツエを作ることは非常に不利である。即ち飛躍者の上達を妨ぐることとなる。

斯様なシャンツェに於ては、飛躍者はしばし三五―四〇米を飛行しても抵抗を受くることは少いし、不倒飛躍も可能である。然し乍ら飛躍者は抵抗の少いものに慣るゝことゝなり常に悪い着陸を覚えることになり易い。そして彼の實力の爲に悪い型を作ることゝなる。

一日に大飛躍丘で四―五回も長距離飛行を試みるとすることは誤つて居る。飛躍者は疲労し、疲労せる踏み切り或は神經衰弱的の踏み切りをすることゝなり、其上更に有効なる動作を習得するこゝが出来ない。

然し乍らとへ飛躍者が遠距離飛行に熟練した後には於ても、彼は常に冬季中種々變化のある小なる飛躍斜面に立ち返つて練習して置かねばならぬ。そして決して大飛躍丘のみに執着して居てはいけない。

この初心者の上達の道程は亦熟練者のそれを一致せる關係を有するものである。夫れ等の熟練者達は冬の初めに當つて矢張り、飛躍競技に對する一定の練習を開始し、そして冬中自己のフォームを確固ならしめんとするものである。即ち最初は小なる抵抗の大なる飛躍丘に於て練習し、次いで上向きシャンツェに進み、尙飛躍競技期間中に、小規模の抵抗の大なる飛躍斜面に於て練習を積むのである。それが彼等のプログラムである。初心者の練習にも熟練者の練習飛躍の時に於けるが如く、その飛躍の欠陥を指摘してくれる専門家を必要とする。

實際に自己の飛型の眞の明瞭なる繪を得ることは非常に困難である。而も他人の忠告がないと不知の間に、再び除去することの困難なる過失に陥り易いものである。

飛躍練習に當つては、各飛躍者は互の義務を尊重すべきである。

飛躍斜面の修理を互に爲すこと。これは根本的條件である。多くの飛躍者は此規律を破り易いものである。

穴の空いた場合には特に之を埋め固く踏みつけねばならない。不幸を招く怖れがある。是は勿論初心者も熟練者も共に爲さねばならない。かゝる務を互に嫌ふことはスポーツ精神に反する醜い事である。

飛躍練習は充分な降雪の後始めて開始さるべきである。降り始めの不充分な積雪状態の場合に飛躍を開始することは痛

しい損傷を招くことになる。

そして飛躍者は全冬季中爲すところなく終るか、或は少くとも支障を來す。

積雪程度は如何程であるべきか、是は嚴密に云ふならば、地面と雪との状態に大いに關係を有するもので、始めの降雪後三〇—五〇厘位の程度が良好である。

雪質關係の不良なる場所、又は悪雪層は避けねばならぬ。最後に飛躍競技會に出場する飛躍者の爲に、二、三參考なるべきことを述べよう。

飛躍者は良く整備されたるスキーを持つて會場に赴くべきである。

バラフィンと一緒に持参することを忘れてはいけない。

雪質狀況、飛躍斜面を照す太陽の光線の影響、バラフィンは他の滑走蠟よりも凡ゆる雪の種類に對して殆んど有効である。縮具はよく靴に調和して居らねばならぬ。

服装を良く整へて着ること。

競技開始前精しく飛躍斜面の事情を観察すること。

アプローチ、シャンツエ、着陸斜面の偏倚なきか。

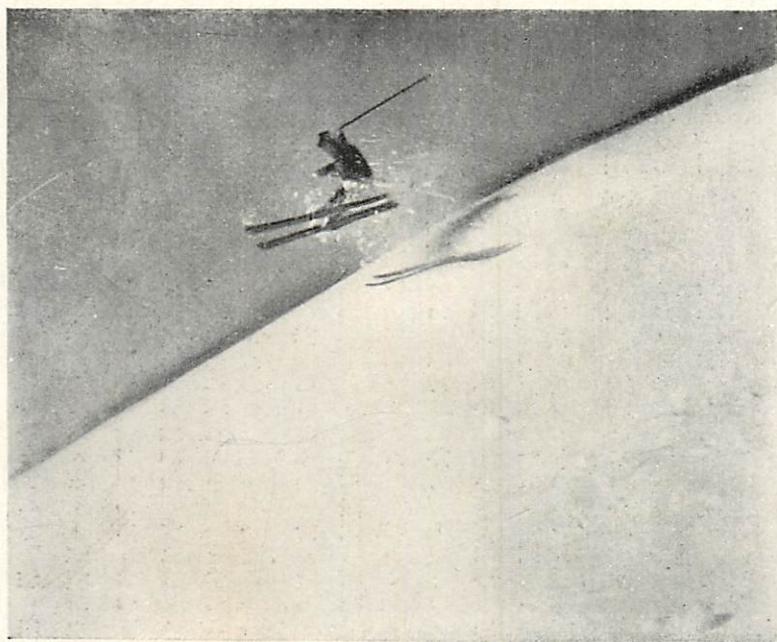
競技開始前數回着陸斜面の滑走を試むること。是は着陸斜面の傾斜を知る一助となる。

自ら自信を持つ爲に圏外に於ては低い姿勢をとる。

競技中競技者の飛躍を注視すること。これによつて飛躍斜面の本質を知ることが出来る。そして大概何れの地點に落ちるかを知る。そして可及的自分のスプールの他の飛躍者のスプールと異なる方向にとる。

競技終了後は直ちに蠟層—Wachs Schicht—のこれるのを防ぐ爲に兩スキーを締めくくる。

(von Wunder des Schneeschuhhs, Sprung und Langlauf)



ドレスブルング

長谷川 敦

スキー滑走に於ける二要素に就いて (一)

岡村源太郎

スキー滑走に對しては各種の要素が多少に拘はらず色々な影響を與へ居るものである。單に登行とか下降、平地行進の場合に於ても絶えず複雑な要素に支配せられて居る。その要素に對する見解は人に依り異り或は區別の方法に差があつて常にスキー家が改善せられたスキー器具や洗練せられた技術を求むるに當つて、それら異つた標準を以て論じようとして居る。之等の各種の要素の中より、今私はスキーそのものに可成密接の關係を有し且つ直線的のスキー滑走に對し割合に大きな影響を與へつゝあるもの二つを拾ひ擧げて、之れに就いて不備な私の觀察を書き連ねて見たい。

スキー滑走に際してスキーは先づ好く滑らなければならぬ。即ちスキーは非常に好い滑りを有する事が望ましい事である。所謂滑り「グライテン」の状態がスキー滑走の際に第一にスキー家の動作に影響を與へるものである。そして猶「スキーは滑るもの」と考へられて居る程に、スキー滑走の大部分はスキーのグライテンに根據を置いて居る。

次に考へられて居るのはスキーのシユテムメンの状態にある場合で、スキーは滑ると共に他面に於ては又全く滑らずに居る。スキー家の動作に力強い所のシユテムブントを得させなければならぬ。即ち滑る要素があると同時に滑らない要素が極めて必要である。そして此の二つの要素は平常のスキー滑走の各般の動作或は動機に對し、色々な影響を與へて主要なるスキー行進の大部分は全くこの二つに支配せられて居るかの如くである。

先づ平地行進の時は「スキーを雪面より離さずスキーを滑らせる」「他脚は前スキーの滑らせつゝある間大部分の体重

を支へつゝ身体を前進せしめる」そして「身体を前進せしめた勢を利用して前スキーの滑りを繼續したまゝ、更に後脚スキーをも同時に滑らせ体を前進せしめる」この動作のうちで第一及び第二部の動作はスキーの滑りを利用するものであつてスキーが好く滑ればよく滑る程その動作は圓滑である。之に反して第二部の動作即ち一スキーを出すが爲の支持をなすスキーは体の前進による反作用を受けて後滑りをする傾向がある。此の時スキーが容易に滑らないで居ると甚だ工合が好く、その結果シユテムメンの状態が完全に保たれるのである。即ち平地滑走にはグライテン即ち滑れば滑る程都合のよい要素と、シユテムメンの要素を考へる事が出来る。

之は又躍進或は三段滑走の時でも同様である。唯スキーの滑りは杖の動作に依つて急速ならしめられ、又スキーの後滑りは杖によつて防止せられる爲に、スキーの滑りの程度の大きい事が一層スキー滑走に有利となつて来る。

次に登行の際はシユテムメンが甚だ重要になつて来て、スキーの後滑りが少い程工合がよい。然し此の場合にもスキーには滑りが猶必要である。たとへ登行の際であつてもスキーは高く雪面より揚ぐべきものでなく、軽く雪上を滑らせて前進せしむべきであるからである。更に躍進或は三段滑走による緩斜面の登行（競走の時使用す）にはスキーは一層よく滑らなければならぬ。即ち斜面を駆け登るのでは無く滑り登る爲には、スキーの滑りが必要である。つまり登りにもスキーはシユテムメンのみならずグライテンの要素を必要とする。

下降の大部分はスキーの滑りである。然しスキーのシユテムメンは全然願感せずでよいかといふに決してそうでない。寧ろシユテムメンの要素に富む場合は、緩斜面の下降の場合に杖の仕事節約する事が出来て而も之に相當の助力を與へ得るものである。即ち下降にもシユテムメンは全然考へに入れなくともよいとは限らず、下降面に於ける二段滑走には明かに關係して来るのである。

即ちスキー滑走の根本をなす所の平地行進、登行及び下降はシユテムメン及びグライテンの要素に大部分を歸せしめる事が出来ると共に、更にグライテン、シユテムメンの充分なる作用によつて、之等のスキー滑走は一層好都合に且つ敏活

に動かせられるのである。私は之を「スキー滑走に際してはシユテムメンに依つて前進運動の基礎を作り、グライテンが更に此の前進を敏活容易ならしむ」との語で形容したいと思ふ。

さて此のグライテン及びシユテムメンの状態を考へるに當つて、實際的には之を良好ならしむるか否かの各種の影響が問題になり易い。そしてその影響を與へるものは色々ある。それを更に述べようと思ふのであるが、その影響を與へる各種の條件を良好ならしむる爲の攻究が、それ等の條件に對してそれ／＼に加へられて行く事であらう。

スキー家の技術

スキー滑走に於けるグライテン及びシユテムメンを巧みに行ふも行はぬもスキー家の技術による處が多い。之を技術の習熟に依つて正しくやつて行ける人は、或限りある自分の体力の使用から最も有効なシユテムメンを爲しグライテンを充分ならしめる事が出来る。初心者が登行に際して他の熟練者より後滑りに苦しみ、甚しい時は一步も前進し得ない事があつた。又平地行進に際しても單にスキーを履いて歩むに過ぎず、殆ど前に滑る事無しに前後の兩スキー共に滑る場合のグライテンが全然欠けて居るのを見る。之等はスキーテクニックに對する未熟さの爲に前述の二要素の機能を充分ならしめ得ないのであつて、之は練習に依つて次第に有効なシユテムメンと充分なるグライテンの要領を會得し得られるやうになる。即ちスキー術の進歩はスウイングが上手になり直滑降が安定になる事以外に、猶それ以外の各種斜面に於ける要領の好いスキーのこなし方を習得するに事により遂げられる。

今簡単にシユテムメン及びグライテンを充分ならしむる爲の注意を二三述べて見る。先づ平地でグライテンを好くするには体重を比較的低く保つがよい。即ち平地行進で前出スキーの滑出し且つ杖で推しつゝある間は適當に腰を低くするやうするがよい。又三段滑走の三步目の歩調に合せて強く兩杖で推進する瞬間は、やはり適當に腰を低くし脚はテレマーク姿勢に近い型を取るやうになる。此の間の呼吸を最も合理的にした者が、一定の体力で最も豊かなグライテンをなし或は

最高のスピードを得る事が出来るわけである。

又シユテムメンに與る方の脚は、その力の加へられる方向が後スキーの後滑りを促さぬ範圍で成るべく水平に近く踏張るがよい。且又杖の使用をこの脚の運動と充分の調和を得させなければならぬ事は勿論である。

次に登行に際しては更に此のシユテムメンを合理的に行ひ、或はその補助として擲き付け登りを行ひ、更にレースに際してはグライテンの要素を充分發揮する爲に特殊の技術を攻究するやうになる。又下降の際には滑降を圓滑ならしむる爲に色々の注意が教へられて居る。体重の掛け方、左右スキーの間隔或は斜面の變化に對する姿勢の變更等についての色々の技巧は、轉倒より遠ざかる爲の手段のみならずそれが又安定なグライテンを圓滑ならしむる所のスピード増進法なのである。

猶登行の時に我々が知らぬ間に廣く應用して居るカンテンはシユテムメンを非常に有効ならしむるものである。之は即ち普通我々が使用して居るスキーの全底面を主としてグライテンの爲に向けしめ、之に反してエッジを以つて後滑りを防いで登ると云ふ一種の技術に外ならない。そのカンテンには更に横登行、斜横登行、魚骨登行等の變型がある事は我々の既によく知る處である。

之等の技術の習得によつて、後滑りする事少く而も好く前滑進して行く事即ちシユテムメン及びグライテンの要素を助くる技術を習得するに就いては、一般にスキー家は相當の練習で容易にその目的を達し得られる。理論を考へる程に困難な事ではなくて二三のシーズンを繰返す間にその要領は充分呑み込む事が出来る。そして更に此の技術に對して優れた所の極めて有能な動作を取る事が出来て而もスキー運動に對し適當せる体力の豊かなる人が、所謂スキー競技者として著しい好成績を收め最も敏活なるスキー滑走を爲し得るに至るものである。

スキーによる影響

スキー改善の標準としてはスキーの滑りが非常に重んぜられて居るが、更にシユテムメンなる要素をも少しく考慮しておく必要があると思ふ。木のスキーそのものによるグライテン及びシユテムメンの状態は、スキーの所謂型に依つて變化し又スキー材質によつて異つて居る。此のスキーの型とは即ちスキーの長さ、幅の状態、断面の形或は全スキーのカーヴが主要なものである。我々の経験によると長いスキーは非常に好く滑る。そして長い程グライテンを助ける要素が増加するやうである。而もシユテムメンはスキーの長さの増す事に依つて大抵の場合餘り害されならしい。そして複杖の使用はスキーの好く滑る事の効能を益々大ならしめて、假りに長いスキーは後滑りし易いにしても平地或は緩下降面では長いスキーが絶對的價値を占めて居る。緩傾斜或は平地がそのスキーグレンデの大部分であるフィンランドに、二米半以上の驚くべき長いスキーの使用せられて居るのも此の結果に外ならない。地形の許す限り技術の運用し得る範圍でスキーはなるべく長からんとして居る。各個人に就いても常に未熟者より熟練者になるにつれてスキーは長くなりつゝある。

スキーの幅も長い経験の結果現在我々の使用するやうな比較的狭いものになつて居るが、單に外形を見たばかりでも樺太製の所謂ストーと普通のスキーとは滑りに於て雲泥の差がある事が想像せられる。馬橋でも荷馬橋以外の輕乗用のものは底金の幅が非常に狭い。猶幅の狭いスキーは登行の際のカンテンの關係を観るばかりでも、シユテムメンが容易であつて大いなる優越點を持つて居る。

スキーの横断面は成るべくスキーの重量を軽くして而もスキーのカーヴを長く保存し、長さに相似ならしめ更にスキーの屈撓に對し充分抵抗せしめやうとして居る之に對しては所謂テレマーク型に屬するものが最も賞讃を博して、ジヤムプ用以外は大抵この凸形を求めて居る。殊に輕きを尊ぶレース用スキーは總て此の型に従ひ且つスキーのカーヴ保有に充分力あらしめんとして居る。

スキーのカーヴはグライテンに對し極めて重要な要素である。同長のスキーでも此のカーヴの有無に依つてスキーの滑りが甚だ異つて居る。甚しい時は下降スピードが二割乃至三割の相違の現はれる事は珍しくない。又單にカーヴもカーヴ

が充分保有せられて居る爲の効果を充分ならしむる爲には、合理的なカーヴの攻究が重要である。スキー製作上の注意、型の選擇或は材種の選び方は之等の問題を基礎としても多くの立脚點を得る事であらう。猶レース用スキーは後滑りを最も嫌ふ故にシユテムメンに對しても有効なスキーでなければならぬ。俗に云ふ軟いスキーは硬いスキーに比して滑りは悪いけれども、後滑りしなくて登りに適して居る。殊に軟雪の差は此の差が甚しく時として軟いスキーの滑りは堅いスキーの半分程に過ぎぬ事がある。然し硬雪の際には此の關係は余り目立たなくなつて來る。

一般的に云へば私は次の如く考へて居る。ジャムプ用スキーは彈力あると共に硬いスキーがよくレース用スキーは軟くて彈力の充分なる或程度までの硬さが必要である。普通用はその中間のものがよい。之等もやはりカーヴの如何材種に影響されて來る性質である。(此稿未完)

今年は第五回全日本スキー選手権大會が札幌に於て開かれることになつたについて、札幌市會は三角山へ一大飛躍臺を建設することを可決した。該設計は北大スキー部員の手に成り理想的なランディング斜面を有し、アプローチは六十五米、殆んど櫓を以て成り、櫓の最高所は約十米、スタートは二ヶ所があり、優に卅五米の飛躍距離を得らるゝものなり。工費約三千五百圓。これにて日本にも世界の本場へ出しても恥かしからぬ飛躍臺が出來上ることになつた。

フイツトヒールド氏を訪ふ

内 山 數 雄

オスロからホルメンコロン行き電車の停留場の、マヨール
スタイン驛に近いところで、インダストリゲート四五番地
が、スキー界の偉人フイツトヒールド氏の宅である。オス
ロの日本名譽領事マテセン氏が電話で紹介して置いてくれ
たので、氏は私の行くのをまつてをつてくれた。應接間に
案内されて始めての面會であるが、舊師とかたるやうな心
地である。

奥さんと二人で、遠來の私を非常に親切にもてなしてく
れるのでまことに愉快である。

『日本にをりましたときからお名前はうけたまわつてをり
ました』といふと、氏は『日本でもスキーはできますか』
といはれる。

私は日本のスキーの寫眞を二三枚氏にあける。氏は大い

によるこんで、奥さんと二人で『日本の雪景色はまことに
よい』といふ。

氏は『これは日本の軍人のスキーであるか』とたづねる
『いや、これは日本の學生のスキーであります』といふと
『日本では學生も軍人のやうな服裝をしてをる』と感心し
てをつた。

應接室にはカップが百あまりもかざられてある。『うつ
くしいカップがたくさんございますね』奥さんが一々説明
してくれる『主人が發明したスキーの締具がよいといふて
、各地のクラブや有志から寄贈されたものである』『まだ
外にもたくさんある』としまつてあるものをとりだして見
せてくれる。なか／＼うつくしいものばかりである。

コーヒをいたゞきながら色々のおはなしをきかせてくれ

る。初めて訪問する家のやうに思はれない。

『この室に銃が五六挺ある。『獵がおすきでございませうか』といふと『だいですきである』といふ。

『兎や雷鳥がうんととれる』といふて、たくさんとつたときの寫眞を出して私にくれる。

この室に大きなトナカイの皮がある。『これも主人がとつたのである』と奥さんがいはれる。そうしてそのとつたときの寫眞を出してみせてくれる。

それから次の應接室でスキーを出して見せてくれる。氏の最近に發明された締具である。

一つは靴の踵にある部分が金でできてをる。靴をはめて踵をぐつこおすと、靴がしつかりとはまる。

なか／＼よくできたものである。エレフゼン美銃でしめたと同じやうになる。はづすきは金のところをおさへて踵を少し上の方に上げると靴がよくはづれる。

今一つは靴の踵の方にあたる革の部分にあたるところがすべて針金で作つてある。革のかわりに針金を工夫して作つたものである。よく考へたものである。針金をきつてまけさへすれば締具になる。至極簡單である。學校の手工に

でもできそうだ。

『この締具には感心しました』と申したところが氏は大によろこんで、まだ／＼たくさん考へたさいはれた。

フィットヒールド氏は若いときはボートの選手であつた運動は何でもすきであるといふ。奥さんは主人の若いときの色々の寫眞を出して見せてくれる。

氏のかいたスキーの本に、シーラブニング(Skiing)といふのがある。

只今ノールウエーでスキーの本では、ウイルヘルムアムンセン氏のかいたのが一番よいといはれてをる。そのアムンセン氏を訪問したとき『あなたはノールウエーのスキーの本で一番よいと思はれる本は』とたづねましたとき、アムンセン氏は、フィットヒールド氏が最もよいとのことである。

ノールウエーの大家がよいといふのであるからなか／＼よいものであると思はれる。

氏から色々の寫眞をもらつた。いくらばなしをきいてもつきない。

氏の宅の前で紀念の撮影をなした。

記念品贈呈

スキーの縮具は色々ある。ノールウエーだけでも百數十種はある。しかし氏の考案を基礎として出来たものが多い。

氏のこの發明されたスキー縮具によつて、世界幾多のスキー家、登山家がうけてをる幸福は偉大なものである。

私がこの春獨逸の体育大學のスキー部長を訪問して、スキーのはなしをきいたときに、獨逸ではフィットヒールド氏の縮具が一番よいとしてをるといふてをつた。

歐洲では氏の縮具が一番よいとせられてをる。

氏と別れるときに、氏の最近の發明された二種の縮具をイル・イツチ・ハーゲン(L. H. Hagen)スキー店にだしてをくから、日本へももつていつてもらひたいといふのである。

深く其厚意を謝して氏の宅を辭した。

ノールウエーの國寶、世界スキー界の恩人、永遠に健在を祈る。

久しく以前よりお知らせして置きしました所の初號よりの本誌購讀者に贈呈する記念品が愈々この程出来上りましたので夫々御送附致しました。品物はネクタイピン、純銀製にてスキーには縁故の深いタンネンの葉を表した優雅なもので、廣田戸七郎君の考案になるものです。

私共の「山とスキー」がこんなにまで立派に、華々しい發展を遂げる様になつたのも讀者諸兄の甚大なる御後援の賜物でなくてはなりません。我々は多大の感謝を持つて居ります。特に私共の「山とスキー」がこの世に生れた最初から陰に陽に御後援下さつた方々に對しては何と感謝したらいいでせうか。

私共は尙今後とも諸兄の御後援を希望し、合せて諸兄の益々御發展を祈つて居ります。(健生)

時 重 大

現在のスキー界に一大革命を與へたと云つても良い事柄にワックスの問題がある。之だけは今の處東西研究を相同じうし、問題にして居る。たゞし遺憾乍ら我が國の程度未だ外國の程度ならず、今正に吸ひ込みの時代にあり。ドン／＼良い處を吸ひ込んで咀嚼して良い材料をつかまへる處までが之から先何年續くことであらう。先へ滑る爲のみにワックス云ふものが必要だと思はれて居たのが、近頃は後滑りせぬ爲に必要だと云ふことになつちやつた。スキーを穿いて先へ先へ進むことを考へて居たのは、昔も今も變りはないが、昔の人はワックスを塗つて返つて後滑りをして汗を出し乍ら先へ進んで居たのであつた。今の人達は此努力を殆んど零にして、先へ先へ猛進して居ると云ふ譯だ。先づ此程度で日本のスキー界の發達の狀態を観察することが出来る。日本で未だ外國程に此ワックス方面のことに關して確とした定見の發表を見ざるは遺憾なり。

○此冬の大會を前にして興味多き問題數々あり。純日本産のスキー材で、三十キロ競技に使用し得る適材は何か。

○三十キロレース位で長短何れのスキーが日本人に適すか
○同じ様なことがジャムブスキーでも云へる、三〇米以上飛んで果してどんな材が純日本産から選ばれるか。
○ぎのワックスをどう云ふ風に塗れば何時間有効であるか
但しレース中の問題である。

○記録の目星しいものが幾つ位出るか。
○一九二八年の國際オリンピッククウインタアスポーツ行として輿論をどれだけ喚起するであらうか。外國選手を迎ふるも可也、日本選手を見學旁々派遣するも可也前者を實現せんとせば、先づ理想的スキー場の設置急務也。

○少くとも理想的飛躍丘必要也。後者を實現せんとすれば多額の費用を要す。されど自費でも宜しいと云ふ人あらば文句なかるべし、外國の理想飛躍丘をも實際に見ず如何にして設備すべきか。なか／＼に觀すれば事容易ならず。

○識者並びに日本スキー界の皆々の人達再考せられて然るべき問題なり。時正に自己團體のみの小利益にとらはれてケチケチして居る時にあらず。一九二八年の國際オリンピックが鼻の先に吊下がつて眼の前でチラ／＼ダンスをして居る時である。

(君 生)

彙報抄録

第二回全日本スキー聯盟加入團

体代表委員會

開催日 十月十七日

場所 東京丸の内日本俱樂部

出席團體 樺太中央スキークラブ

北海道帝大スキー部

小樽スキークラブ

弘前高校スキー部

長岡スキークラブ

草津スキークラブ

稻門スキークラブ

東京帝大スキー山岳部

△明大スキークラブ

△大泊スキークラブ

札幌スキークラブ

青森縣スキー聯盟

東北帝大スキー部

高田スキー團

大日本飯山スキー協會

早稻田大學スキー部

法政大學スキー部

以上十八團體△印の團體と名古屋スキークラブは本日の會議にて加盟承認されたり。

本部より稻田會長、西澤常任幹事、廣田常任幹事出席、加納常任幹事欠席

提案種類別表

- (1) 新加入團體承認の件 本部提出
 - (2) 諸報告及來年度豫算の件 同上
 - (3) 聯盟役員改選の件 本部、早大、稻門
 - (4) 維持會員設置の件 本部
 - (5) 聯盟收入増加に關する件 飯山
 - (6) 關稅に關する件 高田
 - (7) 選手權大會の役員選出に關する件 本部、早大、稻門
 - (8) 競技種目に關する件 大泊、北大
 - (9) ジャムプ審判に關する件 樺太中央、大泊、美唄
- 長距離競走 早大(三〇籽)、北大(四〇籽)、弘前(五〇)
 短距離競走 早大(一〇籽) 北大(一五籽)
 リレーレース 樺太中央、早大、稻門、大泊、北大、札幌
 スラローム 大泊
 複合競技 大泊、北大、弘前
 オールドボーイス 青森

(10) 競技規定改正の件 早大、稻門、北大、札幌、飯山

(11) 豫選に關する件 飯山

(12) 選手權大會開催地に關する件

札幌説 北大、札幌

大鰐説 早大、稻門、青森、弘前

高田説 高田

飯山説 飯山

未定 本部

(13) 大會期日に關する件 早大、北大

(14) 優勝カップに關する件 大泊

(15) 出場手數料に關する件

(16) 外國選手招聘の件

(17) 札幌事務所移轉に關する件 大泊

決定事項

(1) 新加入團體承認

(2) 聯盟役員の件 從來の常務委員は三名共重任となり別に本部に常務委員一名乃至二名増員することの承認ありき、人選は會長、現常務委員に一任となる。

(3) 事務所移轉に關する件 札幌市の事務所は東京の本部

に移轉となる。

(4) 維持會員の件 賛成を得て人選は會長一任となる。

(5) 選手權大會出場手數料の件 該大會手數料は昨年度大會にては參加者の負擔額均一なりしも次回大會より本

聯盟加入外の團體よりの出場者には倍額徴收を決定す

(6) 選手權大會開催期日の件 毎年開催の本大會は二月第一土曜、日曜に行ふを原則とす。

(7) 競技規定改正 規定及規約の改正は、小委員會にて先

づ審査し代表委員會にて承認を得たり。印刷は常務委員に附託

(8) 第五回全日本スキー選手權大會の件

期日 大正十六年二月五日、六日

場所 札幌市郊外

競技種目

短距離競走 十五籽

長距離競走 三〇籽

二月六日 ジャムブ競技、リレーレース(二十八籽)

(9) 選手權大會役員選出に關する件

大會の役員は原則として代表委員會にて選出することに

32

決定、明年度大會には左の人々を候補者に挙げ其中より地方別を考慮して選出することとし、人選は會長及常務委員に一任さる。

役員長 三瓶勝美、鶴見宣信、吉岡信敬

デイスタンスレース係長 高橋進、吉岡龍太郎、櫻庭留

三郎、

ジャムプ係長 西澤勝次、白鳥恒雄、松木喜之七、中野

誠一、

ジャムプ飛型係 中川太郎、廣田戸七郎、半田馬吉

(以上 聯盟發表)

第五回全日本スキー選手権大會地方豫選

期	日
樺太地方豫選	一月十五、六兩日
北海道地方豫選	一月廿二、三兩日
東西地方豫選	一月廿二、三兩日
表日本地方豫選	一月八、九兩日
信越地方豫選	不 明

豫約中の北大スキー部十五週年紀念出版は豫約申込殺到し豫約以外の大方の御希望に沿ふことが出来なかつた。尙同書は發行直ちに絶版なれば今後再び手に入れ難く、貴重なる文献となるであらう。

早大山岳部にては銀座松屋呉服店樓上にて十二月一日より向ふ一週間スキーに関する展覽會開催の由。

主催団体 場所

樺太中央スキークラブ	豊原
北海道山岳會	札幌郊外
青森縣スキー聯盟	大鰐
稻門、福島縣廳	沼尻

(十二月四日調査)

H. U. S. V. 新着圖書

Narciarstwo Polskie 1925.

Rocznikęw Polskiego związku Narciarskiego.

Podrecznik Narciarski.

Przez Inz. Aleksandra Bobkowskiego.

Über Winter-Landschafts und Sport-photographie.

von Carl J. Luthner, münchen.

Skisport.

Praktische Anleitung für Skiläufer.

Davoser Skitouren.

Illustrierter Führer von Hermann Frei,

S. C. D.

Ski 1924.

Schweizer Sport Kreander.

初めの二書は、ボーランドスキークラブの秘書 Ing. J. Wajmewicz 氏より寄贈せらる。

編輯後記

◆本號には北大スキー部の記念出版委員の御了解を得て、該出版物で削減されたる玉稿を頂くことが出来ました。讀者諒とせられよ。

◆本號にはスキー界の大長老、ノールウェー式スキー使用者の大恩人フイットヒールド氏の最近の寫眞及び筆跡を内山氏より寄せられました。深謝に堪えません。

◆本號は「スキーテクニツクの研究」を休載します

◆愈々スキーのシーズンに這入りました。諸兄の御奮勵と御健闘を祈つてこの大正十五年に別れを告げたいと思ひます。

ス
キ
ー
術
階
梯

改訂増補第四版
定價 金六拾錢

ス
キ
ー
ジ
ャ
ム
ピ
ン
グ

廣田戸七郎著
定價 金壹圓
殘部僅少

御希望の方にお願ひ致します。

札幌
山とスキーの會

GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!



製
樹

井
美
山
ス
キ
ー
の
合

東
下
野
村
泰
四
郎
監
製
宣
告
金
六
森
美

具用其ト一キスルナ秀優

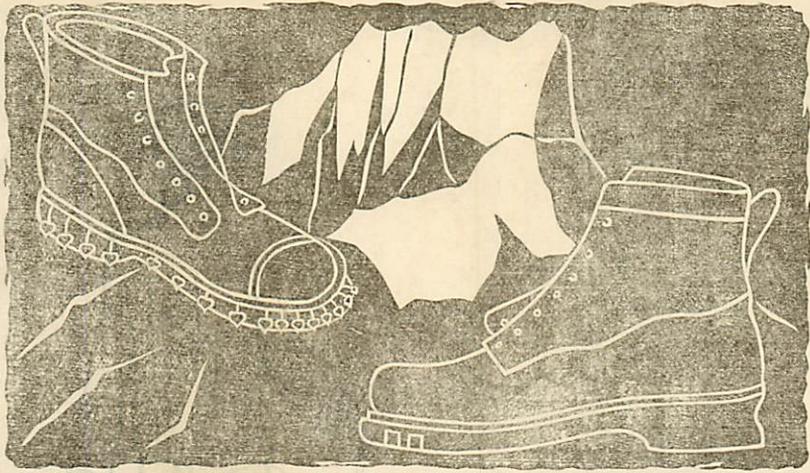
樽 小

店 具 動 運 屋 梅

◇ 命 用 御 賜 ◇

下殿宮各宮階山・宮川白北・宮田竹

用使も行一御隊山登一キッロンアデナカ
く戴を状證る有榮光後朝歸御つ且るさ



の 特 獨 店 當

靴一キスと靴山登

— 呈贈グロタカ —

店 靴 崎 山

角 町 横 大 谷 四 京 東

スキー並 附屬品

製作 販賣

••(呈カタログ)••

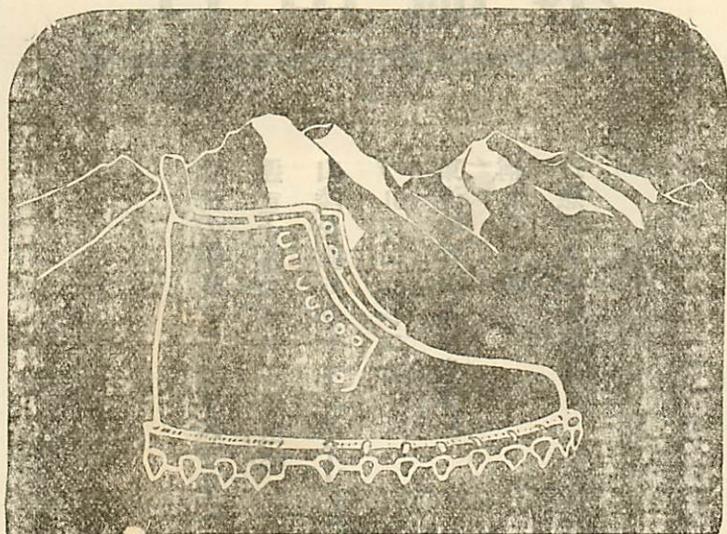


札幌

小谷運動具店

電話 一五六八番
振替 七九六四番

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ
一等賞金牌受領



登山靴とスキ一靴

.....

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七二一號

振替東京六一二七號

第二回青森工業研習會ニ付テ

青 山 温 泉

北海の靈峰マツカリヌブリに
連亘するシリベシの山陵
山陵を飾るタンネンホイメと
フルフェルシュネー
東洋のサンモリツツと
稱せらるる
理想的スキー地！

登山驛とスキー驛

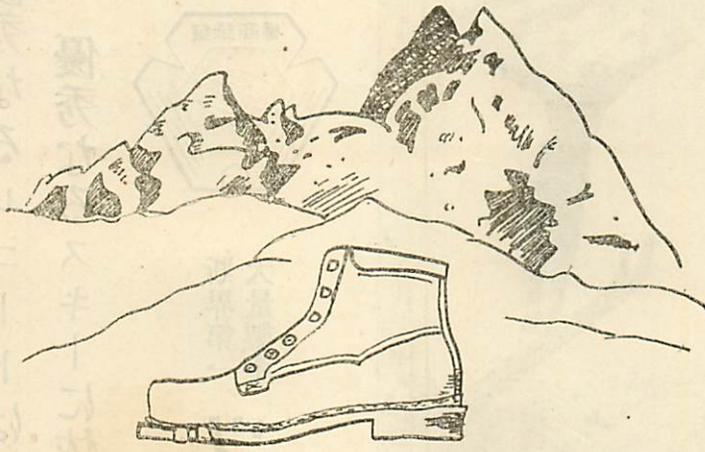
函館本線昆布驛より一里半

札幌幌より一時間五分

函館より一時間七分

青森市川内町一丁目

青森六十二番



靴 一 本 又

種 各

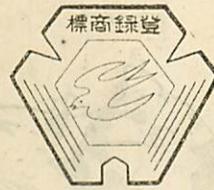
街字十條一南市幌札

店 靴 本 木

優秀なるレコードは

優秀なるスキーに依る!!

全
國
有
名
店
に
有
り



斯界第一
大量製産

ツバメ印スキー



製造元
札幌市

中野商店

スキー部

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は

頂きます。

大正十五年十一月廿八日印刷

大正十五年十二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 山 口 健 兒

印刷兼 廣 田 戸 七 郎

發行者 廣 田 戸 七 郎

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北五條西十一丁目二番地

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
 de la
 Monta kaj Skia Klubo
 No. 67. Desembro 1926. Sapporo. Japanujo.

美滿津のウキンター・スポーツ用具!



MIMATSU-WINTER-SPORTS
OUTFITS

合名會社
美滿津商店

東京、本郷、赤門前

大正十五年七月二十三日第三種郵便物認可
 大正十五年十一月廿八日印刷
 大正十五年十二月一日發行

山とスキー
 第六十七號

定價參拾錢